

第7回「^{さんじょう ひかりしょう}山上の光賞」候補者推薦書

推薦理由

東日本大震災から10年。原発事故で全町民が避難した福島県双葉郡富岡町にある富岡中央医院の院長として、自身も被災者でありながら今もなお被災した住民ひとりひとりに向き合った医療活動を続ける井坂晶医師を推薦する。

震災当時双葉郡医師会の会長であった井坂医師は、2011年3月以降、避難所に指定された郡山市内のビックパレットふくしまでボランティア医療班を立ち上げ、避難住民への投薬や治療を早期に実現させた。避難所で生活する2500人を毎日見回り1人の死者も出さなかった。

同年8月、富岡町が開設した大玉仮設診療所へ移ってからも引き続き2017年3月まで診療に携わり、外来診療だけでなく積極的に仮設住宅に出向き訪問診療を実施し、住民の生活実態を確認しながら的確な生活指導を行なった。井坂医師の診療日には震災前からの患者が県外からも通院するなどこの期間に合計1万4千人の避難住民及び近隣住民を診察した。並行して避難解除後の双葉郡の医療について、帰還する人々を見越した医療体制を再構築しなければとの思いを強くし、それに向けて動くことを決意した。

2017年4月、富岡町の一部地域を除き帰町が始まったが、そのほとんどは災害公営住宅で生活する高齢者であった。若い世代は、労働環境や放射線被曝への不安などから帰町せず、高齢者夫婦のみ・高齢者単独世帯が増え家庭内での見守る力が減少した。集合住宅タイプの災害公営住宅では人との交流も少なく、加齢に伴う健康状態の悪化に加え、孤独死の増加が懸念された。

井坂医師は、こうした事態に備えるためには、富岡町内には二箇所の診療所、一箇所の病院が必要と考え、医療体制の構築に尽力した。2016年10月に富岡町によるとみおか診療所、2017年4月に自身による富岡中央医院、2018年4月に福島県によるふたば医療センター附属病院といった医療機関の開設を実現させ、不安を持つ避難住民の帰町の後押しも担った。

2021年9月1日時点で帰町者は震災前町民人口の約1割の1755人である。40～60代の労働年齢が47%となり、復興を支える労働者の健康管理も大きなウエイトを占めるようになる中、81歳となった井坂医師は、悲願の帰町を果たした住民を1人も置き去りにしない医療活動を続けている。震災以前より、町内の校医、産業医を兼任し、診察の合間を縫って、乳幼児健診、集団予防接種、介護保険認定審査会、郡県医師会の会議、看護学校での講義、訪問診療など、精力的にこなしていた。帰町が始まった後は、日々の診療で感じる健康課題について発信し、町内の地域包括ケアシステムにおいても更に必要な役割を担っている。富岡町での診療を再開した後も、大玉村仮設住宅の患者への訪問診療を継続するなど、震災を通して住民ひとりひとりの状態見守ってきた井坂医師への住民の信頼は絶大である。以上が、井坂医師を山上の光賞に推薦する理由である。

候補者略歴

(学歴、職歴、活動歴など)

昭和43年3月 岩手医科大学医学部卒業

昭和43年～60年 東北大学研修医を経て山形県立中央病院勤務

昭和60年～平成2年 福島県立大野病院勤務

平成3年～富岡中央医院開業

平成23年3月（震災発生後）～5月避難所ビックパレット医療班活動

平成23年10月～2017年3月 原発事故による全町民避難のため避難先福島県大玉村に開設された富岡町大玉仮設診療所勤務

2017年4月～富岡中央医院再開

現在に至る

平成19年～25年 福島県双葉郡医師会会長

以上